

管理課から

管理課では、魅力あるすぐれた教職員の育成を重点目標の一つに掲げ、「人財」の育成を図っています。そのために、スクールリーダー養成研修会や管内の小中学校の全教務主任及び全研究主任を対象とした研修会を開催し、スクールリーダーの養成に特に力を入れています。各市町村教育委員会も独自の取り組みをしていますが、本号では横芝光町の取り組みを紹介します。

横芝光町の研修

平成の町村合併は単に行政区の枠組みが変わったのみならず、教育現場にも少なからず影響を与えています。特に本町は、平成18年3月末に山武地域の横芝町と海匝地域の光町とが県内で唯一教育事務所を跨いでの合併となりました。旧光町の学校に勤務する教職員の中には、慣れ親しんだ海匝地区から様々な点で違いのある山武地区に勤務することとなりました。そうした職員の多くが帰還を希望したため、結果的に短期間に多くの教職員が入れ替わり、その年齢も若くなりました。場合によっては、講師で対応せざるをえない厳しい状況も生じています。

このような状況の中で本町は、次のように層別研修や職能別研修等様々な研修の機会を設けています。

【横芝光町各種研修】

	研修名	対象者	実施回数	主な内容
1	町教職員 全体研修	町内全教職員	年3回	横芝光町の現状 授業参観及び部会別研修(横芝地区・光地区)
2	管理運営研修	教頭・教務・ 中堅女性教諭	年1回	学校運営への参画 危機管理のあり方
3	若年層研修	経験1～3年 目の教諭及び 講師	年3回	グループ討議「事例研修」 講話「今、求められる教師像」 「不祥事防止について」
4	特別支援教育 コーディネーター 研修	特別支援教育 コーディネーター	年3回	特別支援教育コーディネーターの役割 校内支援体制の整備 ケース研修(養護教諭・介助員を含めて実施)
5	介助員研修	介助員	年2回	介助員の役割について 子どもたちへの対応の仕方について
6	体育科研修	体育関係 教職員	年2回	学習指導要領の移行について 学校体育の現状と課題
7	英語担当者 研修	小中学校英語 担当者	年2回	英語学習の進め方 評価について

これらの研修を通して、教職員一人一人の力量を高めています。併せて、学校や町全体で「ともに育つ」姿勢も大切にしています。

新しい町の中央を流れる栗山川と流域の豊饒な土地は、数万年も前の旧石器時代から人々の生活の足跡を残しています。そして、幾多の時代を経て、様々な寺社や伝統文化が生まれ、育まれてきました。そんな小さな町の学舎で学ぶ子どもたちが、九十九里浜の潮騒を聞き、田園の風に四季を感じ、地域の方々の支えに学ぶ喜びを感じ、この地の自然と環境を慈しみ「この町に生まれてよかった。先生と出会ってよかった。」と、いつの日か故郷、栗山川の流れを懐かしく思う感性と優しさを育むことのできる教師であって欲しいと思います。

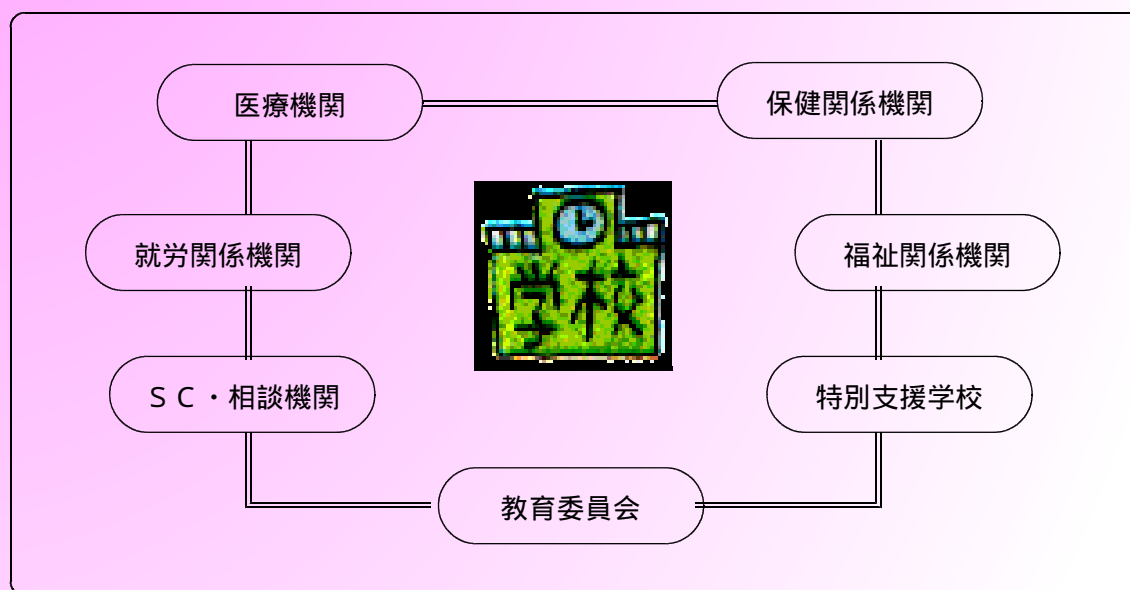
最後に、東上総の北限である本町は、鮭の帰る南限の町でもあります。先生方には本町で力をつけ、他市町村で大きくなり、再び本町に帰ってきてくれることを願っています。

指導室から

特別支援教育の推進について

平成19年の学校教育法の一部改正により、障害のある児童生徒の教育が特殊教育から特別支援教育へと転換されました。時期を前後して、関連する様々な通知等が出されていますが、千葉県教育委員会では、平成18年9月の「特別支援教育体制整備の推進について（通知）」の中で、「障害のある児童生徒のニーズに応じた教育的支援を適切に行うため、各市町村単位若しくは複数市町村による地域ごとに特別支援連携協議会を設置する。」としています。

特別支援連携協議会は、地域における総合的な教育支援のために、医療、保健、福祉、労働等の関係機関や相談機関、NPO等との連携協力によるネットワークです。

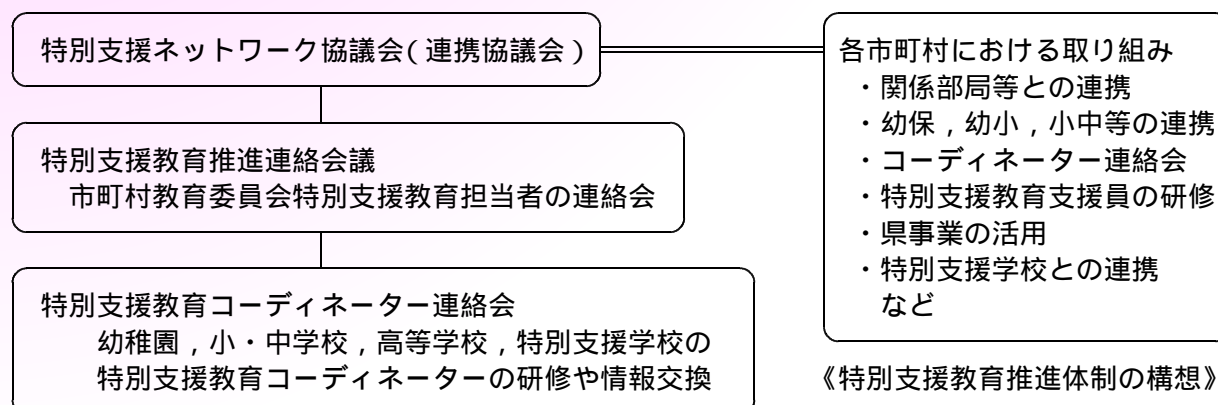


《幼稚園，小・中学校に対する支援ネットワークの構想》

東上総教育事務所では、文部科学省委嘱「平成21年度発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業」を活用し、山武地区及び長生地区特別支援ネットワーク協議会を開催し、広域でのネットワークづくりを進めています。夷隅地区は4市町が協力して広域で特別支援連携協議会を設置しています。

本協議会は、地域の関係機関の方々が一堂に会することにより、互いに顔の見えるネットワーク作りを目指しています。協議では、乳幼児期から学校卒業後までの一貫した支援の在り方、各機関の連携の在り方、市町村独自の取り組みの情報交換等について話し合いがなされています。

このネットワークに加えて、東上総教育事務所では、特別支援教育体制の推進として、次のような重層的なネットワークづくりを目指しています。



《特別支援教育推進体制の構想》



「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方等に関する実践研究事業」 勝浦市立清海小学校

清海小学校は21年度から2年間、文部科学省初等中等教育局国際教育課からの実践研究校の指定を受けて外国語活動の実践に取り組み始めた。

1 実践研究のあゆみ

4月は「何を、どこから、どうやっていけばよいか。」と、戸惑いながらの出発であった。外国語活動は、5・6学年の授業の中での実践だが、とにかく校内研修として全体で取り組んでいくこととした。

5月に指導主事を要請し、「外国語活動の研究のあり方について」の講話をしていただいた。この指導でそれまでは「どうやって?」と迷っていたことが見えてきたようで、実践の糸口がつかめた気がする。これまでの外国語に関する指導は、英語を中心にALTに頼る面が多分にあった。今後は担任が中心となり進めていく授業として、やらなければならないことが山積していることも見えてきた。指導主事の指導で「初めはあまり構えず、とにかくまずやってみること。」の言葉に後押しされた。

6月に初めての校内授業研究を試みた。英語ノートとCD教材の効果的な活用方法を試行錯誤しながら、まずはやってみることによって「こんな感じで授業をすればよいのかな?」というイメージを全職員で確認することができた。

本校の1年目の取り組みとして年間15時間の指導計画(市共通)に従って、5学年の扱う内容を5～6学年合同で2名の担任(T1・T2)により進めることとした。

7月は要請訪問による授業研究を実施した。具体的で細かな内容と方向性を指導いただいたことはここまで進めてきたことを確認でき、次のステップにつなげていく足掛かりとなった。

1学期末の研修では、昨年度から夏季休業前に体験入学している児童の父親(カナダ人)をお願いして「クラスルーム・イングリッシュ」の研修会を行った。また、英語の絵本読み聞かせをしてもらい、子ども達にも職員にも生きた英語に触れるよい機会となった。ちなみに昨年は児童向けに「カナダの文化と生活」についてのお話をしていただいた。

夏季休業中の研修では、意識調査の分析と英語環境の整備を中心にすすめてきた。

2学期は5・6学年担任以外の担任も「自分で外国語活動の授業をやってみよう」ということで授業研究を実施した。自分の受け持つ学級の児童ではないので実際に授業を進めるのには多少無理もあったが、小規模校の利を生かした授業として有効だったと考える。また、先進校の授業を参観したり、地区中学校の英語教師に授業を見てもらったり、中学1年生の英語の授業を見せてもらったりして、本校の研究を更に深めるために役立てている。

11月に2回目の研究授業を実施し、指導主事からこれまでの実践や課題について指導していただく。



2 国際理解教育としての実践

実践研究の指定を受けていることもあり昨年まで実施してきた「ALT英語教室」も、より効果的な実施の方法を探っている。そのひとつとして、月1回の英語教室ではあるが保護者の中の英語の堪能な方をお願いして、担任とALTとのコミュニケーション助手的な役割ができないかを試行した。まだまだ思うようにいかず多くの課題はあるがより良い方法へと改善を図っている。



また、地域にある大学の留学生との交流活動を11月に計画した。留学生から各国の紹介を聞いて、簡単な遊びを教わって遊んだり全員でドッジボールを楽しんだ。一緒に給食で歓談した後は、自由遊びで昼休みを過ごした。この交流で国際理解を図る一助となるとともに、研究テーマである「外国語に親しみ、コミュニケーション能力の素地を育成するための効果的な学習のあり方」へとつなげていきたい。





郷土のすばらしさを再発見し、郷土やふるさと「ちば」に誇りと愛着が持てる生徒の育成 ～副読本「ちば・ふるさとの学び」の活用を通して～

一宮町立一宮中学校

1 「ちば・ふるさとの学び」活用推進指定を受けて

千葉県では「千葉県教育の戦略的なビジョン」の基本テーマの一つに掲げた「郷土に誇りと愛着を持った真の国際人の育成」を推進する取り組みの一環として、中学生がふるさと「ちば」を再認識・再発見し、そのすばらしさを理解し、よりよく未来を拓いていけるよう、副読本「ちば・ふるさとの学び」を作成しました。そして、この副読本を活用した積極的な授業実践を行い成果や課題をまとめ、より効果的な活用方法について、先進的な役割を担う活用推進校を指定し、各学校や地域への情報発信を行うなど「ちば・ふるさとの学び」活用の積極的な推進を図ることとしました。活用推進校は、各教育事務所に1校ずつと県立千葉中学校の計6校が指定され、東上総教育事務所管内では、各市町村教育委員会と相談する中で、歴史のある一宮が適当であろうと判断され、本校が選ばれた次第です。そこで本校としては、総合的な学習の時間・教科・特別活動等の学習に副読本「ちば・ふるさとの学び」等を活用し、郷土やふるさと「ちば」のすばらしさを再認識・再発見させることにより、郷土やふるさと「ちば」に誇りと愛着を持たせることとしました。

2 研究の実際

一宮町は、古い歴史を持つ玉前神社や、江戸中期以降に、一宮藩（加納家）が置かれていた等、歴史豊かな土地柄です。そのため、郷土を知る手がかりの一つの方法として歴史を中心に据え、研究を実践することとしました。また、一宮町は、太平洋に面した海岸から山あいまであり、自然にも恵まれており、その自然に支えられた特産品も多く生産されています。そこで歴史を中心に据えながら、自然の豊かさや食文化にも目を向け、この副読本の活用とそれぞれの調査・研究に取り組んできました。



（玉前神社での学習）

まず、この学習を中心となって進める学年を1年生としました。1年生で地域を知り、2年生で職場体験学習を実施し、地域で活動する。3年生では1・2年の学習を自分の進路に生かす取り組みとする。さらに1年生3クラスを自然コース・歴史コース・食文化コースに分け、その3コースをローテーションさせて学習することとしました。最初に副読本を活用し、千葉県の豊かな自然・千葉県の成り立ち・千葉の食について概要を学習しました。それを基に、地元一宮ではどのような自然に恵まれ、どのような歴史を持ち、どのような食文化が営まれているのかという観点で、学習を進めてきました。

実践例 歴史コースでは、町教育委員会の学芸員を招き、町の文化財などの話を伺いました。これをもとに個々で調べたい課題を決め、同様の考えを持つ生徒でグループ編成し、テーマを決め、学習を進めてきました。歴史コースについては学習のまとめとして10月13日に授業公開を行いました。その中で自分たちの調べた内容をパワーポイントで発表し、好評を得ました。

実践例 自然コースでは、地元の自然保護団体のメンバーを招き、バスで半日の自然観察会を実施しました。その中で、絶滅危惧種の存在を知ったり、サギの群れが生活場所を追われ、海岸の松林に移り住んだところを観察したりしました。また、波に削られ砂浜が狭くなったことも観察し、地球温暖化についても考えるきっかけとなりました。

実践例 食文化コースでは、地元のお寿司屋さんを講師に招き、いろいろな食材等についての話や郷土料理についての話を伺いました。また、地元でとれた魚や果物を使って調理実習も行い、地元ならではの料理にも挑戦しました。まさしく千産千消を実践したといえます。

これらの学習を通して、郷土に誇りと愛着を持った生徒が育ちつつあると思います。今後更に、副読本「ちば・ふるさとの学び」の活用法を検討していきたいと考えます。

郷土一宮が好きになりましたか。
(生徒アンケート結果より)

